あるモダン・ガールの昭和初期（Ⅱ）
—ドレス・メーカーの国際結婚—

平　井　一　弘

前稿「あるモダン・ガールの昭和初期（Ⅰ）」では、モダン・ガール平井満壽（マス）の生い立ち［明治35（1902）年生］と、十歳台半ば過ぎからの読売新聞記者時代の文士修行（大正の半ばから末まで）、および、ついには文士にならず、杉野芳子のドレス・メーカー女学院で洋裁を学び、後に洋裁家（ドレス・メーカー）へと転身したことを述べた。

前稿末で強調したことは、マスはなぜ、他ならぬ、ドレス・メーカーになったのかという疑問であった。マスが近代女性として経済的かつ精神的に独立した人生を歩みたいと強く願っていたことは確かであるが、その願いが、たとえば、当時の多くの近代女性たらんとしたインテリ女性が関った社会運動をバイパスして、洋裁という実利的な近代性の探求に向かったのか。

本稿においてもこの疑問に満足に答えられるとは言い難いのであるが、文士修行時代のマスの作品にかなり顕著に示された、いわば抑制されたエロティシズムとでも呼べるものが、洋裁家マスの初期の洋裁記事にも認められることを指摘しよう。女性解放を目指すには社会運動のみではなく、性の桎梏からの解放やモダンな洋装による開放があってもよいであろう。

大正15（1926）年にマスは杉野芳子に出会い洋裁の道に入りかけていたと同時に、その後2～3年は、もっぱら文芸にいそしんだ時期で、盛んに小説や評論を発表していた。いわば、マスはこの時代に文芸と洋裁との二足のわらじを履きかけていたといってよい。「かけて」というのは、文芸、洋裁のともに修行時代だったからである。

筆者は、マスが昭和の早い時期に自らの文才に見切りをつけて洋裁家になったのであろうと推測している。しかし、文才に見切りをつけたとしても、文学上のモチーフを洋装のファッションで表現することは可能である。すでに前稿で触れたが、マスの文芸作品には抑制されたエロティシズムが見られる。それは暴発寸前で性の衝動を抑制する男女であり（平井満壽子「まがい唐桟」「浴槽」）、断髪した女性のうなじに感じられる美であり、断髪で切り落とした髪の毛の束に感じ取る冷たくうねる官能である（平井満壽子「胸のすくやうな快さ」）。

ドレス・メーカーとしてのマスが、その初期に書いた洋裁記事にも、この抑制されたエロティシズムを認めることが出来る。マスの洋裁への興味の発端がこの種のエロティシズムに関わるものであったのかもしれない。マスは、洋裁家になることによって、経済的、精神的独立を得ようとしたと同時に、モダニティーとしての「肉体的」独立（エロティシズム）を文士修行から継承しようとしたのかもしれない。

以下に簡単に当時の近代的な女性の社会運動を振り返り、マスとの多少のかかわりを見て、

次に洋裁家マスの「女性解放」の一端としてエロティシズムを見よう。

マスが近代女性（モダン・ガール）としての若き新聞記者であったことは確かである。近代性を自覚した新聞記者の多くが、文士になるか婦人運動に走った。洋裁家にはならなかった。マスは、なぜ、婦人運動家にならなかったのか。当時の婦人運動を一瞥してみると、何人かの婦人運動家とマスの間には、職業的、思想的かつ人脈的にいささかの接点はあったのである。

大正デモクラシーと婦人運動

『大正デモクラシーと女性』を著した井出と江刺によれば（90-94頁）、大正デモクラシーの婦人運動の頂点は1920（大正9）年結成の「新婦人協会」の活動である。「新婦人協会」は前年の1919年から結成2年後の22年にわたって、日本では最初の本格的な婦人参政権運動を繰り広げた。「新婦人協会」の理事は平塚らいてう、市川房枝、奥むめお。その綱領は以下の通りである。

一、婦人の能力を自由に発達せしめるため、男女の機会均等を主張すること

一、男女の価値同等観の上に立ちてその差別を認め、協力を主張すること

一、家庭の社会的意義を闡明すること

一、婦人、母、子供の権利を擁護し、彼らの利益増進を計るとともに、これに反する一切を排除すること

井出と江刺はこの綱領の文案に平塚らいてうの思想が込められているとする。著者らによれば、らいてうの思想はその母性保護論に現れているように、単に男女同権にだけあるのではなく、母と家庭とにあること、そのためにも社会改造へ向かうことであった。

著者らは、らいてうの協力者であった市川房枝についても述べている。市川は1893（明治26）年愛知県の農家の生まれ。師範女子部を卒業して、小学校教員となる。名士の講演会に参加したり、『読売新聞』の「婦人付録」を熱心に読んだり、キリスト教に触れたり、当時の婦人運動家と知り合った。市川は、「大正デモクラシーの流れの中で社会改造に自分をかけたいという思いで」名古屋新聞の記者となった。当時新聞記者は「ゆすり」同様に考えられていたから、周囲の反対もあったけれども、「房枝は魚が水を得たように活動し、婦人団体めぐりや奥様訪問に毎日忙しかった。」（103-106頁）

男女の価値同等観を認める点でらいてうとマスは同様であったろう。『読売新聞』の読者として、また婦人記者の経験者として市川とマスは時代と経験を共有している。だが、マスは「新婦人協会」の母性保護と家庭重視には違和感を覚えたかもしれない。マスは家庭にはいささか冷淡であったようだ。さらに、マスはここに描かれている市川のような、自己実現と社会改造に、しゃにむに突っ走るような女性ではなさそうである。

『婦人雑誌からみた一九三〇年代』（16-22頁）によると、平塚らいてうなどが発行した『青鞜』が家族制度批判のために発禁となり、その結果、婦人問題への議論がジャーナリズ

ムで高まり、大正5（1916）年に、中央公論社が『婦人公論』を発刊した。こうして、「『青鞜』によって提起された婦人問題を、市民主義の立場から提案する編集方針は、インテリ女性から大きく支持された」。1930年代でも、1930から33年頃までは、良妻賢母型の他の婦人雑誌に比べて社会問題を反映した記事が控えめながらあった。しかしその後戦時体制下で軍国主義をあおる記事が増えてゆく。そして、1928（昭和3）年の治安維持法の改定による特高警察の設置、1938（昭和13）年の内務省警保局による「婦人雑誌ニ対スル取締方針」によって、国家の動きに追随してゆく。この「方針」は、まず第一に、恋愛小説に対する取締りを強化して、女性の「不倫」や「低劣な描写」を取り締まりの対象とした。

マスが文士としての活動をやめるのが1928（昭和3）年である。治安維持法の改定と無関係ではないかもしれない。

マスが新婦人協会に関ったという記録はない。それに対して『婦人公論』にはかなりな数の記事を書いている。読売新聞の記者時代の随筆、評論も、また後には洋装記事も書いた。マスは、若い時から自活できる職業婦人を目指したように、平塚らいてう以降の婦人運動の女性の自立思想の側面を受け継いでいる。しかし、らいてうや房枝が社会改造を志向したのに対して、マスは女性の自己改造を強く推進しようとし、ついには日本婦人の服装改造を自分の天職としたのであろう。そう考えるとマスの思想と行動は、社会運動家のそれとは異なり、むしろ『女人芸術』によった女性たちに近かったのかもしれない。

尾形明子の『女人芸術の世界―長谷川時雨とその周辺』は『女人芸術』に集まった人々を「昭和の初め、モダニズムと左傾がほとんどすべての知識青年層を包み込み、やがて軍国主義に向かっていった時代、その時代の波に翻弄されながらも、自分自身の選んだ道への歩みを、片時も止めることを知らなかった女性たちである」（2頁）とした。父親の決めた道に従う良妻賢母こそが女の生きる道であった時代である。女性の解放が集団の力によって、制度上の改革を要求することによって成し遂げられることは多いが、「個々人が一人の人間として、伸びやかに生きることを願い、満身創痍となりながらも生きた時、ウーマン・リベレーションは始めて根付き豊かな実りと広がりをもたらすはずである。」（同上）

「モダニズム」は文学やその他の芸術に当てはめられる言葉であるが、マスの洋装もまさにモダンであったろう。マス自身ドレス・メーカーになることによって日本婦人を和服とそのイデオロギーから解放しようとしたと見れば、彼女にしても他の洋裁家にしても、社会運動を担った女性たちと同じく、女性解放を目指したと言えるのかもしれない。

新女性同盟

マスが女性解放のための社会運動に関ったとする証拠はない。しかし、平塚らいてう等の有名な「新婦人協会」ならぬ「新女性同盟」なるものに関ったかもしれないことを示す記録はある。『朝日新聞』［昭和7（1932）年12月15日朝刊］は「新女性同盟」が日比谷公会堂でアマチュア劇を演ずるとの予告記事を載せている。「婦人職業戦線に活躍しているあらゆ

るインテリ女性を集めた新女性同盟というのがある。」メンバーは英美子（詩人）、長山はく子（画家）、多川澄子（画家）、黒崎悦子（教育家）、堀江かど江（作家）、望月百合子（作家）、大野栄子（美容家）、洋裁家のマス・ケート、参政運動家の高橋千代子、高木富代子、雑誌記者の荻野綾可、水町淳子。

これらの人々が翌年（昭和8年）2月7日、午後6時半から日比谷公会堂で「純然たるアマチュア劇を見せよう」となった。「各々の職業的立場から見た現代の社会をあるがままに表現してみたら、そこには多くの悲喜劇と皮肉なユーモアが織り込まれているに相違ありますまい」とたいした鼻息である、とこの記事は述べ、さらに「劇の外に舞踊と音楽と漫談までお添えものにするそうだ」と冷やかしている。

この予告記事がどこまで正確なのかはわからない。日比谷公会堂に問い合わせたところ、この日には国家主義者の大会はあったが、婦人の会合の記録はないとのことであった。

「新女性同盟」についての調べもつかない。だが、「新女性同盟」に一部左翼作家とモダニスト文学者が絡んでいたことは事実である。堀江と望月はプロレタリア文学全集に入っているれっきとした左翼作家である。両者とマスの接点はある。『婦人公論』［昭和2（1927）年1月号］は、何人かの女流知識人に新年の思いを語らせているが、そこにマス（平井満壽子）は「笑ひたい」を寄稿し、堀江は「今年は……」を載せている。

さらに、前稿でも触れたように望月とマスは同じ頃に読売新聞の婦人記者であった。どちらもお互いの知己を記したものは目下未見であるが、一面識もないということはあるまい。ともに名うてのモダン・ガールであった。

英美子は、西条八十に師事した詩人である。作品は、例えば、矢野峰人編『日本現代詩大系』（第7巻、河出書房新社、昭和50年）で読むことが出来る。左翼ではなくモダニズムの詩人と言えるであろう。他の人々の調べはつかない。

しかし、この予告記事は、左翼やモダニストを含めて、多くのインテリ女性が女性解放に関ったことを示しているのであろう。それにしても、マスがプロレタリア作家の堀江や望月と一緒に女性同盟に関ったとは！大正デモクラシーの残光の中にあったこの時代を思わざるを得ない。

洋裁家のエロティシズム

『婦人サロン』［昭和7（1932）年8月号］は「花嫁講座　服装の巻」を載せている。この講座中「洋服」の部分（204-209頁）がマス・ケートの担当である。「洋服」の文章はマスが文士修行からドレス・メーカーへの転身の理由を暗示してくれるようだ。すでに何度か指摘したように、文士修業中のマスは、暴発寸前で自重する男女の性を描く奇妙なエロティシズムをテーマとする掌編小説2篇を残している。この洋裁記事にも、この種のエロティシズムがある。小説では、暴発寸前の情欲が自重で包まれていたが、「洋服」の文章では、初夜の花嫁の裸体が、高価で美しいデザインの衣装で包まれて脈動している。ともに制約されたエ

ロティシズムと言える。

「花嫁講座」の「洋装」の見出しは「若さを洋装に包んで」。本文は次のように書き出される。

> なめらかな肌がしめったように汗ばんで、張り切った美しい顔にはどんなブライトな色だって、そのままその顔色の中にとけこんで行くに違いない。誇らしく輝く美を持った花嫁！

ここでは花嫁のブライトな衣装の色が一層ブライトな肌の中に隠れる。あるいは、肌がそのまま衣装になる。続けて、

> さて新婚後初めての夜、彼女は一生のうちで、最も美しい、最も高価なナイト・ガウンかパジャマを着なければなるまい。私は、よく作られたパジャマが見せて呉れる下着なしの美しい腰を、女の持つ美の中で、一番魅惑的なものだと思う。

ここでも衣装と肉体の密着が暗示されている。

マスは近代女性のエロティシズムを、媒介物に抑制された美として、やはり抑制された文体で描いた。自分の断髪を描いた「胸のすくやうな快さ」の中で、マスは断髪をした女の首から頭に「近代的な感覚的な官能的な美」を見た。上の花嫁の肌の湿りや「下着なしの美しい腰」にも「近代的な感覚的な官能的な美」なるエロティシズムが感じられる。

マスの掌編小説では、(1) お互いに別々に結婚している男女の情欲が通りがかりの人を眼にすることによってその暴発を抑制される、あるいは (2) 近所の子供を一緒の浴槽に入れて感ずるエロティシズムを、はっと気がついて湯から出る女性が描かれた。おそらくこの抑制装置が、洋裁家としてのマスにとっては、「洋装」なのだろう。

ドレス・メーカーへの転身

マスがドレス・メーカーへの転身を果たした昭和の初年に、マスの身に何が起こったのか。杉野芳子の自伝『炎のごとく』(日本図書センター、1997) や、同じく杉野の「洋装事始め」における回想、その他によって、簡単な年表を作成してみよう。

大正15 (1926) 年　マスと杉野が出会う。
昭和 2 (1927) 年　マスの作家活動のピーク。
昭和 3 (1928) 年　7月に結婚。その後洋裁家としての活躍が始まる。
　　9月　平井満壽子「友達という言葉」。
昭和 4 (1929) 年　ミセス・ケート「初めて洋装する人々へ」『婦人公論』4月号。
昭和 5 (1930) 年　1月　マス・ケート『洋装通』。秋に渡米。

昭和６（1931）年　2月　帰国。

上の年表を少しく敷衍する。一部は前稿と重複する。

大正15年にマスは洋行帰りの杉野芳子に会う。少し後に杉野の学校ドレメで学んだ。ドレメ卒業後に銀座に店を出した。

杉野の回想は正しいが、マスがドレメで何時、何を学んだのかは明らかではない。「何時」を問えば、おそらく昭和2年から3年にかけてのいつかである。「何を」との問には、後述のドレメ初期のカリキュラムに準ずるもの、と答えられるであろう。また、杉野によれば、マスはドレメを卒業した後に銀座に店を出した。マスは渡米に当たり「銀座に出したケート洋装店」を売ったと言う（後述の「富士子」参照）。「ケート洋裁店」は、マスが結婚した昭和3年から5年にかけて銀座にあったことになる。

昭和2～3年はマスの旺盛な作家活動の時代である。マスの作家活動は大正14年から昭和3年までであるが、昭和2年がそのピークである。昭和3年9月号の『婦人公論』に「友達という言葉」を書いて文士活動は終わったようだ。「友達」とは夫ポールのことを言うらしい（後述）。

マスは、昭和3年の7月に結婚。その後に洋裁家としての活躍が始まる。昭和4年にはミセス・ケート名で「始めて洋装する人々へ」（『婦人公論』4月号）。昭和5年1月に発行された『洋装通』は、当時としては、本格的な服飾のテキストであるようだ。秋には夫ポールとともに渡米。ニューヨークの「ミッチェル」洋裁学校で学ぶ。

昭和6年2月に帰国の後に、杉野によれば、マスは白木屋のデザイナーをしたり、マス・ケートファッション・スクールを創設した。こうしてマスは初期の洋装界のために活躍した。

以下に、マスの国際結婚とその後の洋裁家としての活躍について述べる。

国際結婚

マスこと平井満壽は昭和3（1928）年7月、26歳の時にポール・ケートと結婚した。夫ポールは、明治23（1890）年に来日したユニヴァーサリスト宣教師の息子で、アメリカ生まれ（1900年）で東京育ち。結婚した頃には慶応商工学校（現在の慶応義塾中等部の前身校）を始めいくつかの学校で英語を教えていた。ポールとその家族については次稿で詳述する。写真は、結婚後、数年してからのマスとポールである。

1934（昭和9）年のマス・ケート、『主婦之友』18巻4号

1934年頃のポール・ケート、慶応義塾『商工学校七〇年誌』

慶応義塾に残されたポールの履歴書から推測すると、マスは昭和5（1930）年、28歳の秋から約1年半、翌年2月末までポールとともに滞米し、その後、やはりポールとともに帰国した。後に、各種の婦人雑誌に紹介されたところによれば、マスは、その間にニュー・ヨー

クの「ミッチェル」という学校でドレス・メーキングを学んだらしい。

マスの滞米や帰国については、後の雑誌記事の紹介文やポールに関する記録からある程度推測できる。目下のところマス自身による滞米記録は見つかっていない。

結婚のいきさつについてマスは2回ほど婦人雑誌のインタビュー記事で語っている。一つは「外人と結婚した婦人記者の結婚挿話」[富士子『婦女界』[昭和5（1930）年3［月］号]、他は「エチオピアに嫁ぐ黒田雅子姫を囲んで、国際結婚に成功した婦人の座談会」[『主婦之友』18巻4号［昭和9（1934）年4月]。

まずは前者を詳しく見ることにする。マスをインタビューしている「富士子」はマスの知り合いで記者仲間だったようだ。マスの結婚には直接関係はないが、当時のモダン・ガールの生態を知るうえでまことにおもしろいので、富士子さんの記事を多量に引用するが、お許し願いたい。以下は、富士子さんによるこのインタビュー記事の書き出しである。

「華やかなシャンデリヤの輝くところ。瑪瑙色の無数の香水の瓶、舶来の化粧品、そして不思議な薬品等々……が水底のスペクトルの様に、キラキラと輝いて居ます。

丸ビル階下の三共のソーダファンテンは、それらの渾然とし(ママ)て芳香の中に、折にほのかなウエストミンスターの煙を交ぜて、今日の午後も、所謂『お茶を飲む人』で賑って居ます。」

次は富士子さん描くところのマスの姿。「マス子さんは肉色の絹靴下の足を軽く組んで、すっかり板についた黒づくめの洋服に、真赤に塗った口紅も、決していやみには見えません。マス子さんは器用な手つきで、オレンジエードをかきまぜながら」自分の結婚のいきさつを語ったというのである。

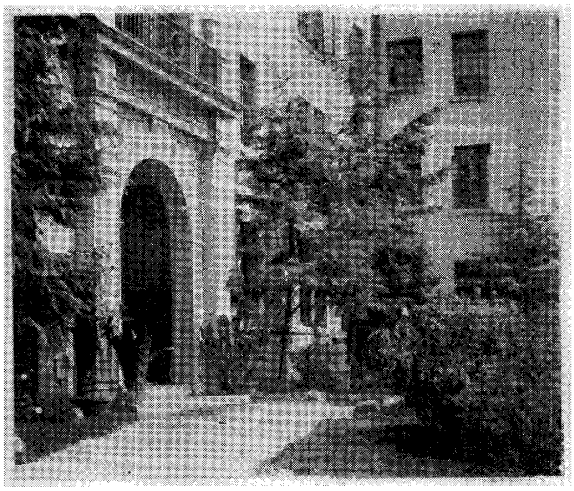
マスが語る結婚話は、大略、自分の結婚は恋愛結婚ではなく、インド人を媒酌とする見合い結婚で、自分の「西洋かぶれ」と、夫の「日本かぶれ」との折衷だというものである。長い長い引用になるが、なかなかおもしろいいきさつであるし、このような話はなるべく当人の口から聞きたいものでもあるし、また夫ポールとその家族の紹介にもなるので、お読みいただきたい。富士子さんからポールとの出会いを問われて、

「それがおかしいんですよ、私たちは誰でも恋愛結婚の様に思って居るのですが、実は全然知らない同志(ママ)で、しかも印度人が媒酌してくれたんですの。」

そこで富士子さんは、それこそ「国際的結婚(インターナショナルマレージ)」ね、と合いの手を入れる。

「ええ、面白いでしょう。それは一昨年の夏でした。私が語学の先生の所に通って居た時に、そこでその印度人とは知り合いになりました。ところがその人が或日突然社（読売新聞社—引用者注）へ電話をかけて来て、『私の友人のアメリカ人に、適当な日本の奥さんを探してあげたいのだが、誰かあなたのお友達の間にでもいらっしゃらないでしょうか』というのです。私は何気なく、『それでは考えておきましょう』とその日は電話を切りました。ところがまた少し立って、電話がかかってきて『せっかくお世話をしてくださるおつもりなら、一度その当人をあなたが下見しておいて下さると大変都合がよいのですが、何ならこれからその人の所へ、二人で行こうではありませんか……』というのでしょう。何の野心もない私

ですもの、気楽にその日ケートの住んでいた、文化アパートメント（本郷にあった文化アパート—引用者注）へ行きました。それから五日してまたその印度人が来て、『あなたケートさんと結婚しませんか？』って、まったく寝耳に水の話をしたのです。」


本郷の文化アパートメント（当時）

そこで富士子さんは、この印度人は「なかなかお上手ね」と合いの手を入れるのだが、マスもこの印度人の「お上手」に乗った節もある。

「ええほんとうよ、初めは一寸変でしたけれど、よく自分というものを考えて見ると、先刻もいったように、私は古い型の主婦にはなれないし、西洋好きではあるし、いっそ外人のほうがいいのではないかと思いました。それにケートはアメリカ人でも半分日本人の様な人なのです。日本に来ていた牧師の息子ですが、小学校は市ヶ谷小学校を終え、中学は暁星を出た人で、それから本国のアメリカへ行って勉強して来た人だったのです。そして復日本に帰ってきて、明治学院と慶応の講師をして居ました。又その母親という人は、三十五年も日本に居て、語学の教師をしながら六十になっても、シェークスピーヤの研究をいつもしているといった様な教養の高い人ですし、妹なども自分の名をチズコ（千鶴子）という日本名をつけて居るほど、日本馴れた日本びいきの人たちでもありました。こうした家庭なら、いじけた日本人との結婚生活より、もっと理解してもらえましょうし、私が新聞記者である事なども、寧ろ喜び迎えられる家庭でもありますし、かたがたそんなことで、私の心も少しずつ傾いてきました。」

マスはさらに続ける。「ケートにしても、日本育ちですから、ヤンキーガールと結婚するほどアメリカ式でもありませんし、どしどし翻訳ものなどをしてゆこうと考えている人なので、それには多少文筆の持てる日本婦人と結婚して等というようなことから、人種は違っても、まあ歩みよったとでもいうのでしょう。古くから日本に住まい、日本の学者のうちでは、ずいぶんケートの父母を知っていらっしゃる方もあるので、そんなことから調べも十分につき、話は案外早く決まって約一ヶ月目の後に婚約するまでにいたりました。」

大正時代初期のエラ・ケートと娘のチズコ

ポールの母親であるエラ・スティムソン・ケートとその娘チズコ（Ione Chizuko）の写真を載せる。エラは慶応や早稲田で英語の教師をしていた。特に早稲田の西洋演劇の振り付けをし、松井須磨子にも振り付けを教えた（河竹繁俊、37-42頁）。エラは松井須磨子に英語も教えたようだ

(Ione Chizuko Cate Nelson参照)。チズコは幼稚園から小学校まで四谷の雙葉女学校で教育を受けた。ポールの父アイザック・ウヲレス・ケートは宣教師として布教に携わる傍ら早稲田で英語を教えた。ケート一家のことについては次稿（Ⅲ）で詳述する。

亭主はアメリカ人だけれども、半分日本人のようでかつ良家の出であるから結婚したなどとは、マスはいやに堅実なモダン・ガールなのかもしれないが、当たり前の見合い結婚のようでもある。しかし、次の広告ほどの警戒は、寧ろ西洋的であろう。

「それから私たちはたびたび会う機会も多いと思いましたので、不良外人とでも歩いているように思われてはならないという、私の兄の注意からすぐジャパンタイムスとアドバータイザーに、婚約の広告を出しました。」

「兄」の名は平井四郎。東京高商を出て、後に三省堂で「コンサイス」などの英語の辞書や英語教科書の編集に携わった。

富士子さん相手のマスの話にはその他いくつか面白いことがある。箇条書きにする。

(1) マスが変なことに気がついたこと。ポールの母がアメリカに帰るときに、家財道具を始末するのに、それを息子に与えるのではなく、適当な値段で売ったということ。

(2) マスは自分の夫のポールを西洋人とも日本人とも思わなくなっているのであるが、友達の西洋人はやはり西洋人に見えること。

(3) この夏（昭和5年の夏）を限りに、「当分ケートの国のアメリカへ行って住まうつもり」でいること、そんなことで銀座に出した「ケート洋装店」も売ってしまったこと、また、「早く日本のオヨメサンを連れてこい」とみんなが待っていること。

(4) 富士子さんは「視線を集めた平井満壽子さんの結婚も、蓋し行くべき道に、正しく賽を投げられたと申せましょう」と、いやにしゃちこばっていること。

マスの結婚は世間の注目を集めたようだ。新進の若い女流文士が結婚する。しかも、相手はアメリカ人。富士子さんは、旧知のマスが行くべき道に、正しく行かないかもしれないと心配をしたのか。

アメリカで待っていたのは誰であろう。昭和5年のマスとポールの渡米時には、ポールの父のウオレスはすでに死亡していた。母のエラは昭和3年に帰国したから当時はアメリカにいたはずである。ポールの妹のチズコは、夫婦がアメリカに着いた直後にニューヨークでともに生活した（Ione Chizuko Cate Nelson)。そのほかの兄弟と姉が当時アメリカにいたはずであるが、どのようにマスとポールを迎えたのだろうか。

マスの結婚のいきさつは、大体、上述の通りであろう。それではマスはこの国際結婚からどのような異文化理解を学んだのであろうか。

昭和9～10（1934～35）年になるとマスは30歳を過ぎ、国際結婚も板についてきた。ジャーナリズムもこの結婚の異文化性を聞きたがったようだ。「エチオピアに嫁ぐ黒田雅子姫を囲んで、国際結婚に成功した婦人の座談会」[『主婦之友』18巻4号（昭和9（1934）年)]や読売新聞［昭和10（1935）年6月25日朝刊］「職業婦人を女房にもてば（16)」(マスとポ

ール夫妻へのインタビュー記事）では、マスはあるときには西洋風に振舞い、別の時には日本風に振舞っている。

先ず、「エチオピアに嫁ぐ黒田雅子姫を囲んで、国際結婚に成功した婦人の座談会」。昔も今も国際結婚をした夫婦を見ると、お互いの文化の違いをどのように調整して生活しているかが興味の的だ。この座談会の出席者は主客の「子爵黒田廣志氏令嬢黒田雅子姫」の他にハリス・ヨシノ、ガントレット恒子、ラグーザ・お玉、大槻投網子、マス・ケートである。マスだけが性と名を西洋式に反対に表記している。

マスは「先日、アメリカの雑誌に」書かれていたエチオピアのことを話す。皇帝陛下と口を利くときにはハンカチで口を蔽う。「科学的には自分の吐く炭酸瓦斯が、高貴な人にかからない」ためだが「ちょっと面白い習慣ですね。」また、猛獣を飼いならして高貴な客には主人がそれに触って見せる、これが最高のもてなしだと言う。アメリカ雑誌仕込みの新知識を披露して黒田姫を脅かしているのか、からかっているのか。

これは他の人が語っている日常的な文化比較、例えば、小見出しで見れば「世界中で一番やさしい日本婦人」「親切な西洋の男子」「西洋婦人の中にも感心な人がある」「始めてあった舅たち—西洋の両親たちはすぐに打ち解ける」とは違うのである。マスのエチオピア文化の披瀝は「始めてあった舅たち」のところに出る。つまり、黒田姫に、将来のエチオピアの舅について、アメリカ仕込の知識を披瀝しているのである。マスの異文化性は日米間にとどまらず、アメリカとエチオピアまで広がっている。

そうかと思えば、マスは、ポールの「両親」にアメリカで額にキスをされて迷ったと平気で述べている。「平気で」と言うのは、マスがここで言っていることは、にわかには信じ難いからである。マスはポールの父ウオレスには日本でもアメリカでも会っていないはずである。だが、母エラには東京で会っている。エラとしてもマスをどのように扱ったらよいかは解っているはずである。キスされたかどうかはともかく、エラはマスが迷うようなことは何もしなかったであろう。エラの娘でポールの妹のChizukoによれば、エラは子供を暁星や雙葉などの日本の学校に通わせるなど日本風に育てたとのことである。おかげでこの兄妹は子ども時代には英語が話せなかったとのことである（Ione Chizuko Cate Nelson）。

ここでも国際結婚＝恋愛結婚が話題にされ、マスは「実は私見合い結婚なのです。情熱的に、どうでも一緒にならなくては･･･というように結婚したわけではありませんから、さばさばしていまして、あまり喧嘩もいたしません。」さらに続けて、「父が貿易商をやっていましたので、外人の知合いも多かったのです。ケートと結婚する頃にも、外人からの求婚が、他に二つもあったほどでした。」これらの発言も何かおかしい。少くとも黒田姫の前では座談に参加した国際結婚の先達の他の人たちのほうがよほど「日本的」なのである。マスはむしろアメリカ的姿を黒田姫に見せようと振舞っているのではなかろうか。

次に読売新聞のインタビュー記事「職業婦人を女房にもてば（16）」でも見合い結婚の美点が語られている。見合い結婚はぬるま湯に入ったようなものだから、熱くなることも冷た

くなることもない。飽きると言うことがない。「私ポール好きよ。ポールも私を好きなの。でも恋愛なんて激しいものじゃなくて、友情と言う程度の好きさだわネ。」

「好きよ」などとは見合いであろうが、当時はもちろん今日でも、恋愛であろうが新聞記者の前で普通は口にしない言葉だろう。ましてや「…好きさだわネ」とは！　新聞は「時間は別々　子供はなし　私さびしいです」と記事の表題にポールの気持ちを汲んでいる。ポールの本音かどうかはわからない。しかしマスは、こんなことには気にかけない風である。「顔を合わせない日が多いんですからネ」と認め、食事の世話は自分の母に任せ、家計も母に任せ、体が弱いから子供は出来ない、仕事に精一杯。今日の少々気楽なキャリアウーマンの発言を聞いているようだ。「母」の名は平井ワス。本稿の筆者の祖母である。

ここでマスが書いた小評論「友達という言葉」[『婦人公論』昭和3（1928）年9月、40-42頁]に触れておく。結婚後半年して書かれたこの文章で、マスは自分は「個人的に男の友達を持つということはできないように思われる」と言う。自分と男との関係は、熱烈な恋愛関係か、隣人としての愛という「無責任な感情」かであって、男との間に友情は成り立たないであろう、と言う。マスはポールと恋愛をしたのではないと繰り返して述べている。すると、無責任な隣人愛で結婚したことになる。あるいは、見合い結婚のポールとの間には、思いもかけず、友情が生じたのか。世間に対して、マスは自分の結婚を説明しきれていないようだ。

マスの活躍

昭和3年7月の結婚後に、マスの洋裁家としての活躍が始まる。上に見たインタビューや座談会も、マスが洋裁家として有名になってからのものである。

マスは昭和4年から11年にかけて5本の短い婦人服記事を、読売新聞に書いている。読売新聞の記事以外にも、昭和4年からいくつかの婦人雑誌に婦人服記事を書き始めた。最初は、『婦人公論』[昭和4（1929）年4月]の「洋装の常識と選び方　初めて洋装する人々へ」。マスの結婚後の記事であり、「ミセス・ケート」名である。この文章は実に伸び伸びとしていて、マスの小説や評論に見られる屈折がない。

昭和5年にマス・ケートの名で『洋装通』[昭和5（1930）年1月]を上梓した。序言でマスは、「私は好きな洋服を日本の皆さんにおすすめしたいのと自分ももっと洋服を研究したい為に、新聞記者をやめてドレスメーカーになってしまったのです」（2頁）と言っている。繰り返しになるが、マスは大正15年から昭和3年の間のある期間、杉野芳子のドレスメーカー女学院で洋裁を学んだようである。しかし、『洋装通』に述べられている知識をどこで習得したのか、当時のドレメでそれだけのことを教えられたのか、など知りたいことはたくさんある。

おそらく昭和初期のものと思われる「ドレスメーカー女学院学則」（杉野服飾大学より提供された）によると、カリキュラムは「洋服科」と「帽子科」の別に作られており、「洋服科」の専門科目は「裁断」「縫方」「仏蘭西刺繍」「西洋洗濯および仕上法」となっている。

いずれも実技科目である。それに対して、『洋装通』は洋装に関する実科練習というよりは、洋装に関する蘊蓄の披瀝であり、「科学的に見た衣服」という章もあれば、18世紀以降から19世紀後半にいたるまでのフランス服装史が全部で5章、約45ページにわたって述べられている。マスが杉野のドレメで学んだとしても、当時のカリキュラムをはるかに超える内容が『洋装通』には書かれているようである。マスはこれだけの知識をどこで、どのようにして仕入れたのか。

内井乃生によれば、日本における西洋服装史の研究は、1929～1939年に、初めてまとまった研究が出始めたようであるが、日本語で書かれたものとしては『西洋婦人服装史』が日本で初めての通史である、とされている。今和次郎『西洋婦人服装史』は1936（昭和11）年に興文社から出版された。マス・ケートの『洋装通』は1930（昭和5）年に出ているから、マスが今和次郎の『西洋婦人服装史』を参考にしたとは考えられない。

『今和次郎集第7巻』の「解説」（401頁）で石山彰が述べているところによれば、1920～30年代にはヨーロッパで服装史研究熱が高まった。ドイツでもイギリスでも浩瀚な服装史の研究書がいくつか著された。マスは読売新聞の記者時代かその後に、これら西洋の研究書を読んだのかもしれない。しかし、その語学力と文化的知識はどこで得たのか。

『洋装通』が上梓されると、古巣の読売新聞はこの『洋装通』を含む「通叢書」を円本に変わるものとして2日にわたって紹介した。1回目［昭和5（1930）年2月12日朝刊］にはマス（「ケート夫人」）の顔写真。翌日の2回目には、『洋装通』の著者を次のように紹介した。「マス・ケート夫人の『洋装通』は何しろ昨今大流行の断髪とか婦人洋装とかトップを切って元読売婦人記者の著だけあって、近頃問題になっている婦人服の着こなし方に解決の妙案を下している。」

ここではマスのモダン・ガール振りがわかればよいのだが、蛇足を付け加えるならば、評者も断髪や洋装はよくわからないようである。同じ評者は、同じく「通叢書」のひとつ『鰻通』を「あのヌタリタラリするやつを能くも要領よく掴んだものだ」と評したが、洋装はもうひとつ掴めなかったらしい。

杉野は、マスが二年滞米して、帰国後は、「白木屋デパートのデザイナーをしたり、マス・ケート・ファッションスクールを創立したりして、初期の洋装界のために活躍された」と述べている。このことの裏づけを、少々行っておこう。

マスは昭和7年春に帰国したが、昭和8～9年以降は杉野が言うとおり、白木屋デパートのデザイナーをしたり、マス・ケート・ファッションスクールを創立したりした。同時期に両方を兼務したのであろう。『婦人画報』［昭和8（1923）年］5月号には、「マス・ケートファッションスクール」との肩書きのマス・ケート名の記事がある。また、同誌同年12月号には「白木屋　マス・ケート女史」の肩書きでデザインが発表されている。デザインのコートは白木屋製とある。同誌昭和9年（1934）6月号には「白木屋婦人服部」マス・ケートとある。同誌同年12月号には「ファッション・スクール院長」マス・ケート。

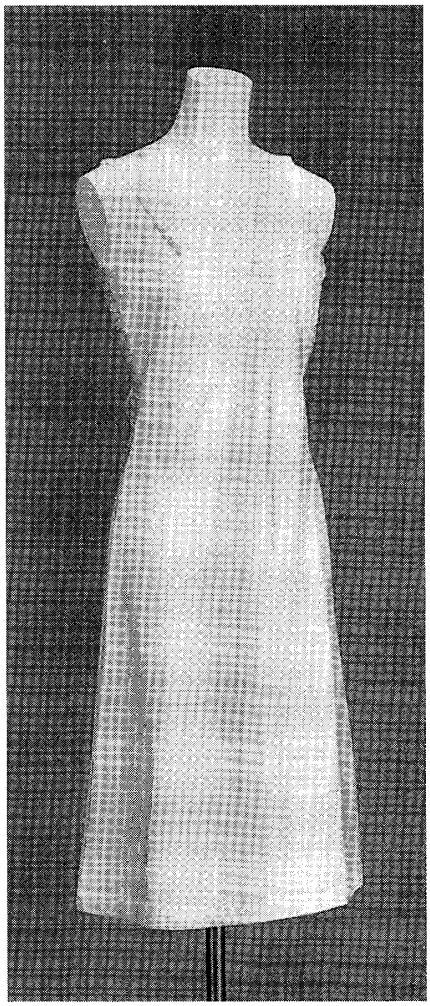
昭和11（1936）年、マス34歳の時に『洋裁　禮装と下着』を刊行した。山脇敏子との共著で、マスは後半「下着」を担当。肩書きは「ファションスクール校長」。おそらく、当時までに、マスはかなり有名な洋裁デザイナーになっていたようだ。

翌年の昭和12年までには、確かに、「マス・ケート指導ファッションスクール」が、東京銀座西五ノ二（電話（57）銀座5463）にあったとの証拠がある。すなわち『スタイル』［昭和12年12月1日］に、この銀座の学校の広告が載せられている（31頁）。

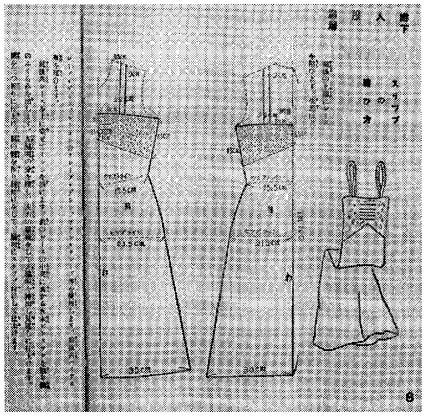
2006年の10～11月にかけて、愛媛県歴史文化博物館は「ときめくファッション～小町娘からモダンガールまで～」（平成18年10月）という平成18年度企画展を開催した。ここに『洋裁　禮装と下着』からマスがデザインした下着が復元されて展示された。写真はそのデザインと復元である。転載を許可していただいた同博物館と担当学芸員の松井寿氏に感謝を申し上げる。

昭和4年の『洋装通』から昭和10年代前半まではマスがドレス・メーカーとして最も活躍した時である。しかし、昭和6（1931）年の満州事変から、8年の日本の国際連盟脱退、9年のヒットラー総統就任、11年の2・26事件、12年の日中戦争開始の激動の中で、ポールもマスも戦争で引き裂かれるなどとは思わなかったのであろうか。新聞記者もマスやポール自身も、あまりにも屈託のない国際結婚夫婦の姿を描き出している。しかし、ポールは昭和12（1937）年には日本を離れアメリカに帰国した。

マスの戸籍上、マスとポールは昭和14年1月25日付けで協議離婚した、とある。この手続きがどのように行われたのかは解らない。マスとポールの間に子供はいなかった。



スリップ（復刻資料）
山脇敏子とマス・ケートによる『洋裁禮装と下着』を基に復元した下着。
復元協力　高原学苑ドレスメーカー専門学校
愛媛県歴史文化博物館蔵



『洋裁　禮装と下着』
山脇敏子　マス・ケート
昭和11（1936）年　和洋女子大学蔵

参考文献（前稿に記載した文献は除く）

『朝日新聞』昭和7（1932）年12月15日朝刊5面。

愛媛県歴史文化博物館『ときめくファッション～小町娘からモダンガールまで～』平成18年10月（平成18年度企画展カタログ）。

「エチオピアに嫁ぐ黒田雅子姫を囲んで、国際結婚に成功した婦人の座談会」『主婦之友』18巻4号［昭和9（1934）年4月］、170-187。

尾形明子『女人芸術の世界―長谷川時雨とその周辺』ドメス出版、1980。

石山彰「解説」『今和次郎集第7巻』ドメス出版、1972、401。

内井乃生「後記」（「服装史」『今和次郎集第7巻』ドメス出版、1972、145。

河竹繁俊「後期文藝協会―組織―變後の文藝協会」坪内雄蔵『逍遙選集』第12巻、春陽堂、昭和2年。

今和次郎『西洋婦人服装史』興文社、1936。

『スタイル』　昭和12年12月1日、31。

杉野芳子「洋装事始め」『婦人画報創刊70周年記念　ファッションと風俗の70年』婦人画報社、昭和50年。

Nelson, Ione Chizuko Cate. *Story of my Life in Japan & Anywhere―1906 to 1921―*. キリスト教同仁社団（タイプライター印字の私家版、出版年不詳）。

『婦人画報』昭和8（1923）年5月号。

『婦人画報』昭和8（1923）年12月号。

『婦人画報』昭和9（1934）年6月号。

『婦人画報』昭和9（1935）年12月号。

マス・ケート「花嫁講座　服装の巻　洋服」『婦人サロン』昭和7（1932）年8月号、204-209。

矢野峰人編『日本現代詩大系』第7巻、河出書房新社、昭和50年。

山脇敏子・マス・ケート『洋裁　禮装と下着』興文社、昭和11（1936）年。

『読売新聞』「職業婦人を女房にもてば（16）」、昭和10（1935）年6月25日朝刊。